授業における興味の喚起―学生としての経験・教員としての働きかけ
第 155 回関西スペイン語教授法ワークショップ（TADESKA）例会
日時：2022 年 8 月 6 日（土） 14:00 - 15:00
場所：Zoom を利用したオンライン開催
担当：小川　雅美

El despertar del interés: Experiencias como estudiante y acciones como docente

CLV Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai (TADESKA)
Fecha y hora: Sábado, 6 de agosto de 2022, de 14:00 a 15:00
Lugar: En línea (Zoom)
Ponente: Masami Ogawa

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本ワークショップの目的

1) 日本の学校（高校・大学）でスペイン語を学ぶ意義を、「学習経験と興味喚起」についての事実から出発して考察してみる。
2) 過去の事実についての記憶を活性化することにより、時代を超えた意義、これからの語学教育の意義を追求する素材を増やす。

活動の内容

全員の話し合いにより、次のことを言語化、共有、考察する。

1) かつての学習者として私たちが、授業を通してどのように興味を喚起されたか。
2) 現在まで、教授者としてどのように受講者に興味を喚起するような働きかけをしたか。

活動の流れ

1. Mini charla「『意味・経験・興味』へのアプローチ」
2. ウォーミングアップ：Zoom のチャット機能を利用した書き込み（上述の「活動の目標」の 1）と 2)。
3. グループディスカッション：グループに分かれて同じ話題についてさらに話し合う。
4. 全体ディスカッション：グループディスカッションで話し合われた内容を共有し、全体でさらに話し合う。

内容

Mini charla「『意味・経験・興味』へのアプローチ」

言語学、教授法にも関わる応用言語学において「意味」とは言語の意味的側面（意味論・語用論）を指すのが普通である。しかし、学習とは、教室の内であっても外であっても、学習の主体者（＝受講生＝学生）の経験を通して生じるものである。教室での学習では、教授者が学習者の学習経験に大きく影響する。学習者が、教えられる外国語を「意味ある（＝意義ある）経験」として接するかどうかに注目したい。

発達心理学者の岡本夏木は、「意味」を次の２つのレベルで扱う（岡本 1999, 2000）。

・記号論的意味：記号や言語とそれらが表す対象や内容との関係

・存在論的意味：行為や存在にこめられている機能的価値や意図、動機、目的、理由、根拠、価値、それらがもたらす心的内容

外国語の授業では、主に「記号論的意味」の方が学習の対象に含まれる。しかし、授業を受けること自体が学習者にとって経験である以上、「存在論的意味」が不可避的に関与する。学習内容への興味とは、この「存在論的意味」に属するものと言える。

教室における「学習」の事実を、教学活動を通した、受講生による「経験」として見ることで、学習経験における「存在論的意味」の側面を浮かび上がらせることができるのではないだろうか。その際、「興味の喚起」は、喚起される受講生にとっても、喚起しようとする教授者にとっても、学習が起こる契機（受講生にとっては「経験」、教授者にとっては「行為」）となる。本ワークショップでは、参加者の学生時代の経験と教員としての働きかけの行為の両面について言語化することを試みた。

ワークショップ参加者から出た内容（上述の活動の流れ 2, 3, 4 をまとめたもの）[1]

1)　かつての学習者として私たちが、授業を通してどのように興味を喚起されたか。

・言語（スペイン語）自体。音の響き。

・スペイン南部では "s" を発音しない。

・私は入学時にすでにスペイン語圏での経験があったので、久しぶりにスペイン語を話せる環境ができたこと、スペイン語を体系的に学ぶ場に立てたことがうれしかった記憶がある。また、授業での学習を進めるにつれ、自分の誤解やあいまいな知識の穴が埋まっていくのは楽しかった。文法の勉強自体は得意ではなかったが…

・大学１年次に「イスパニア語圏入門」という授業が必修であり、その中で文化や歴史を教えてもらった。

・語学の学習より、スペインの文学の話。概論であったが興味深かった。

・輪講（スペイン語の先生７名がスペイン語圏について講義する）がよかった。

[1] 同様の質問をワークショップ内で複数回行ったため、以下の回答内容には若干の重複がありうる。

・文化概論の授業で、セゴビアの水道橋の話を先生が熱心に話されて、世界史で習ったいろいろな建物について興味がわいた。
・La profesora nos enseñaba muchas canciones y cantábamos en la clase de inglés.
（訳：英語の授業で先生がたくさんの歌を紹介してくれたり一緒に歌ったりした）
・1 年生の時に先生に音楽を聴かせてもらった。
・(Como estudiante de japonés) utilizando materiales reales, recuerdo mucho cuando usamos una canción de Utada Hikaru durante la clase. （日本語の学習者として、生教材を利用して学んだこと。授業中に宇多田ヒカルの歌を使ったことをよく覚えている）
・生教材を使った授業
・卒業生が授業に来て話をしてくれたこと。
・卒業生がスペイン語圏でスペイン語を使って働いていることをよく話してくれた。スペイン語を使ってどんな仕事ができるか、具体的なイメージがつき、大学の勉強でゼロスタートでも自分もそうなれるのでは、とモチベーションが上がった。
・私は、IMF や中南米の警察（パトリック・オスターの『メキシコ人』）のことなどに興味を喚起された記憶がある
・スペインのフランコ政権時代のジョークを先生が教えてくれたこと。
・あまり覚えていない。
・特に強く印象に残ることは実のところない (時間がたてば思い出すかも)。
（→そういう経験がないことが、むしろ教師になったときに自分はもっとスペイン語圏の小ネタとかを学生に与えたいという現在の自分の思いにつながっています）

2) 現在まで、教授者としてどのように受講者に興味を喚起するような働きかけをしたか。

・ちょっとした言葉の成り立ち（girasol, parasol, usted の成り立ちなど）について話したりする。
・英語との違いに驚く学生がたくさんいるので、そこを強調して教えることがある。
・獣医学科の学生に対して、アメリカ借用語の動物の単語の説明。例えば、"león→puma" など。
・ (Como profesor de español) intento crear materiales originales y ofrecer información interesante a los estudiantes.（スペイン語の教師として、私はオリジナルの教材を作り、学生たちに興味深い情報を提供ようと努めている）
・実物を使って授業をする。
・Cuando pongo alguna foto personal, siento que los estudiantes se involucran mucho.
（私が自分のプライベートの写真を見せる時、学生がとても関心を寄せるように感じる）
・スペイン、中南米の写真を見せたりして、少しでもその地を感じられるようにしている。

・音楽、世界遺産の短いビデオ。
・メキシコの留学経験を話すとほとんどの学生が熱心に聞いてくれる。
・自分のスペイン語圏での経験を話す。
・自分が留学等した時に楽しかったことや面白いと思ったことをエピソードとして話すことがある。そういう話を聞いて、自分も行ってみたいなと思ってくれたらいいなと思って。
・自分が旅行した時の話をする
・授業の合間に小ネタを挟むようにしている。YouTube に「日本語音声、スペイン語字幕」のアニメがあるのでそれを紹介したり、オリジナル教科書に「スペイン語圏文化」の小冊子を付け加えたりしている。
・なるべく色々な話題をするようにしています。父の日の前にスペインのビールの話をすると、「買いました」と言って写真を見せてくれることが多いです。
・学生が興味を持ちそうなテーマ（レストランなど）
・ゲームの話をする
・教室にスマホや PC があるので、自分の知らない世界だと自分でちょっと調べられる。
・雑談をシリーズで行う
・不本意入学の学生たちがいることを受けて、卒業生や上級生に教室に来てもらい、スペイン語を彼らから教えてもらう
・(学生時代特に強く印象に残るような経験がないことが、むしろ教師になったときに自分はもっとスペイン語圏の小ネタとかを学生に与えたいという現在の自分の思いにつながっている。自分はときおりスペイン語圏に関する小ネタとか、アリカンテに長期滞在したときの話(小ネタのストックが増える経験だった)をしている。

このワークショップについての考察

上記のことについての話をしているうちに終了時刻となったため、ワークショップ内ではまとめは行わなかった。一方、発表者に対して「今日のワークショップが学習の意義にどう関連づけられるのかわかりにくい」という意見があった。これに対して、発表者からは「学習とはなんらかの経験からしか生じない[2]ので、学習の契機となる『興味の喚起』を中心課題とした」という趣旨の回答をした。興味は学習者が学習の意義を感じる１つの要因であると発表者は考える。

この実施報告を作成するにあたって、ワークショップ当日に出たいろいろな「興味の喚起」を上のようにまとめた。その結果、参加者の多くがスペイン語学（言語学）専攻であるにも

[2] 外国語学習において「経験」という言葉からは、留学や旅行の経験、ネイティブ話者と話す経験が連想されることが多いのではないだろうか。しかし、大変の学習者は教室内で授業を受けるという経験をしている。経験者を受身的なものとしてではなく主体者として捉える視座は、自分自身の学習経験の振り返りによって、少なくとも部分的には得られると考えられる。

関わらず、全体として、言語そのものへの「興味喚起」よりも、文化や音楽、体験談など、言語外の事柄への「興味喚起」の方が、学生としても教員としても多いことがわかった。このことは、言語自体が興味深さに欠けるということでは決してないが、初学者にとっては、「存在論的意味」の方が「記号論的意味」よりも、興味喚起が生じやすく、またそれが必要であるということを示唆している。特に、1), 2)それぞれに挙げたうちで一番下のコメント（同一の参加者によるもの）によると、自分の学生時代には興味を喚起されるようなことを経験した記憶がない（思い出せない）ので、逆に今の学生たちに興味喚起のためのいろいろな働きかけをしている。外国語の学習とは、たとえ入口ではそれ自体が興味深いものであっても、学習を始めると困難の連続であり、かつ実際に使用する機会に乏しいため学習意欲が持続しにくい。すると、学生にとっては「単位さえ取れればよい」ということにもなりかねず、それが彼らにとって学習の意義になってしまうならば、何のためにその科目が存在するのか見えにくくなってしまう。そのため、スペイン語の世界を知っている教員たちが学生たちにその世界を伝え、疑似的であっても経験させていく努力をしていると言えるのではないだろうか。そのようにして「存在論的意味」を提供しながら「記号論的意味」に学生たちを導くという側面が、教師の働きかけの中にあるように思われる。

参考文献

岡本夏木（1999）「第 3 章　言語発達研究を問いなおす」中島誠・岡本夏　木・村井潤一著『ことばと認知の発達』pp.140-201. 東京大学出版会

岡本夏木（2000）「第 1 章　意味の形成と発達」岡本夏木・山上雅子編『意味の形成と発達一生涯発達心理学序説』pp.1-28. ミネルヴァ書房